

教師夏目金之助の研究(八)

—寺田寅彦との師弟関係—

森 下 恭 光

緒 言

本論では、夏目金之助と寺田寅彦の師弟関係をその出発点である第五高等学校から夏目のロンドン留学中、帰朝後の第一高等学校、東京帝国大学在職中の期間についてその実態を明らかにすることを目論む。

夏目の門下生達の中で、学校で教師としての夏目に直接指導を受けた者の数は決して少なくない。しかし、夏目と寺田の師弟関係は、他の門下生とのそれに比して異質なものを具えていることがしばしば指摘される。本論では、その異質なものを明らかにすることも意図するが、同時に異質性を超越する同質性あるいは共通性というべきものをも明らかにすることを意図する。

自然科学者（地球物理学専攻）であると同時に文学方面にも俳句、随筆等にその多才な側面を見せる寺田は、ある意味では師の夏目を超えていたと見ることもできること、とくに、自然科学者としての資質により、夏目を刺戟してやまなかった存在であったことを明らかにしたい。

—

寺田寅彦と夏目金之助の接触は、寺田が明治29年9月、第五高等学校に入学したことによって始まる。明治11年（1878年）生まれの寺田と、慶応3年（1867年）生まれの夏目との間には約10年の年令における隔りがあり、寺田が入学した時、夏目は29歳になっていた。

夏目はこの年の4月、愛媛県尋常中学校を辞任し、友人菅虎雄の斡旋で第五高等学校講師に就任（月給百円）した。当初は、菅虎雄の家に同居し⁽¹⁾、5月10日に熊本市下通町103番地に一戸を借りて移る。この借家で夏目は同年6月9日に貴族院書記官長・中根重一の長女鏡子と結婚式を挙げた⁽²⁾。その1ヵ月後の7月9日には、教授に任ぜられる。寺田が第五高等学校の学生になった時点では、夏目は教授に昇格していたわけである。この後、夏目は短期間に住居を変える。すなわち、同年9月末には市内合羽町237に移っている。下通町の借家には約4ヵ月居住したに過ぎない。

次いで明治30年9月10日、熊本県飽託郡大江村4101番地に移る。さらに明治31年春には熊本市井川淵町8に転じる。そして、同年7月、市内の内坪井町へ移っている⁽³⁾。

この間、夏目は英語教師として教育に専念する一方で、明治22年以来親交を深めて来た正岡子規の影響を受けつつ続けて来た句作を五高の学生達に指導する場として、近代俳句の会『紫溟吟社』を結成する⁽⁴⁾。また、明治30年10月10日の五高開校記念式典では教員総代として「夫れ教育は建国の基礎にして師弟の和熟は育英の大本たり⁽⁵⁾」と祝辞を読む。

この時期、五高の学生であった寺田は校内、教室で接しただけの夏目に対して、学校外で接する機会を持つことになる。それは寺田の方から接近することによって実現する。

寺田の述懐によれば、五高の第2学年の学年試験が終わった頃のことであった。寺田と同県の高知県出身学生の中に学年末試験に失敗した者が2、3人あり、彼等のために、それぞれの受持ちの教員宅を歴訪し「点をもらう」運動をする委員の一人に寺田が選ばれ、夏目の英語試験を失敗した学生（寺田の親類つづきの学生）の為に夏目の私宅を訪ねることになった。当時、夏目の住居は、熊本市井川淵町8にあった⁽⁶⁾。寺田は、白川の河畔で、藤崎神社の近くにある閑静な町であった⁽⁷⁾、とその印象を述べている。

自分のためではなく友人のために「点をもらう」運動に来た学生であっても、そういう用件の学生に対しては玄関払いを食わせる教員もある中で、夏目は快く会って「委細の泣き言」の陳述を黙って聞き入った⁽⁸⁾。しかし、点のことについては諾否を明らかにしなかったという。

この用件が終わった後に雑談をし、その中で寺田は夏目に対して「俳句とはいったいどんなものですか⁽⁹⁾」と質問する。寺田は、夏目が俳人として有名であることを知っていたことと、自分自身、俳句に興味を持ち始めていたことがあってそのような質問をしたのである。すなわち、寺田は五高2年の明治31年1月3日の日記の中に故郷をしのんで次のように記述し、俳句を一首したためている。「旅衣ひとりかたしく冬の夜の夢を破りて木枯らしの音——古枯らしや故郷の火事を見る夜かな⁽¹⁰⁾」

また、同年1月10日には、「春陽堂懸賞俳句を出す。」の記述がある。俳句は次の二首である。「野に老いて菜の花のみは見飽かざる」、「僧が庵菜^{いんさい}の花生けて茶もあるらし⁽¹¹⁾」

このように自分自身が句作を試みていた寺田にしてみれば、その道で有名な夏目に俳句について何か聞いてみたいと思ったのは当然の心理であったといえる。

これに対する夏目の答えの中で、強く印象された言葉を寺田は記述している。「俳句はレトリックの煎じ詰めたものである⁽¹²⁾。」、「扇のかなめのような集注点を指摘し描写して、それから放散する連想の世界を暗示するものである⁽¹³⁾。」、「いくらやっても俳句のできない性質の人があるし、始めからうまい人もある。」というのがそれである。

夏目の話を聞いて更に俳句への関心を高めた寺田は、夏期休暇で高知へ帰ると、手当たり次第の材料をつかまえ、2、30句ばかり作り、9月に熊本へ着くと直ちに夏目にそれを見せ批評を乞うている⁽¹⁴⁾。

作品に対して夏目は、短評や類句の書き入れ、添削を行った。また、その中の2、3句の頭に○、◎を付けた。これを機に、寺田は句作をしてはそれを夏目に評価してもらうため週に2、3度も夏目の私宅を訪ねるようになる。寺田が頻繁に訪れるようになった頃の夏目の私宅は市内の内坪井町にあった。明治31年の7月に、井川淵町から移転していたからである。この住居は、現在も内坪井町4-22に保存され、熊本市教育委員会が管理している。熊本城の北方にあり、坪井川が近くを流れる閑静な住宅街に位置しており、敷地が1434㎡、建物が232㎡の比較的大きな住居である⁽¹⁵⁾。

寺田は当時五高に近い立田山麓に下宿していたので、夏目の住居には遠かったにもかかわらず、「まるで恋人にでも会いに行くような心持ちで通った⁽¹⁶⁾」と述懐している。

玄関の左にある6畳の和室とその西隣に位置する8畳の和室が寺田と夏目が接する主

な空間で、とくに8畳の和室は居間と書斎を兼ねていたもので、夏目は主にこの部屋で寺田に面会したと推測される。寺田の追憶によれば、その時の夏目は、「いつも黒い羽織を着て端然として正座していた⁽¹⁷⁾」。

寺田が提出する句稿は、夏目の評価を受けるのであるが、後には夏目自身の句稿と合わせて正岡子規の所へ送られ、それに子規が朱を入れて返すようになる。その中より選ばれた若干の句が子規の関係する新聞『日本』に掲載された。

俳句の指導を夏目から受けていたのは寺田だけではなく。厨川千江、平川草江、蒲生紫川等⁽¹⁸⁾もやはり夏目の私宅で指導を受けている。

寺田は、夏目に俳句の指導を受けるため、夏目の私宅に出入りするようになるにつれ、夏目の私宅への住み込みの願望を抱くようになった。その結果、彼は書生として夏目宅に置いてもらえないか、との相談を夏目に持ちかけた。これに対して夏目は「裏の物置きなら明いているから来てみろ⁽¹⁹⁾」といって案内してくれたが、その部屋は畳が取り除いてある上にごみだらけで本当の物置きになっていたのも、意気消沈し、諦めたと述懐している。

この件に関しては、夏目夫人の述懐もある。夫人によれば、寺田がぜひ書生に置いてくれといって来たのに対し、夏目が、「自分のところになんぞ書生にいたってしかたがない。第一座敷も少ないし⁽²⁰⁾」というのにも臆せず、物置きでもいいと懇望するので物置きに案内したが、話はそれきり立ち消えになったという。寺田本人の述懐と夏目夫人の述懐の間には多少の違いはあるものの、寺田が夏目の居宅に同居したいとの願望を強く抱いていたことを証明する事実であることに変わりはない。

一方、寺田は五高でも夏目の指導を受けていた。英語の授業で夏目が用いたテキストはThomas De Quinceyの“Confessions of an Opium Eater”とGeorge Eliotの“Silas Marner”であった。

授業の進め方は、夏目がただずらず音読して行き、逐語的解釈にこだわらず、むしろ大まかで達意を主とするやり方をとり、「どうだ、わかったか⁽²¹⁾」という風であった。しかし、「文中の一節に関して、いろいろのクォーテーションを黒板へ書くこともあった⁽²²⁾」から、単調な進め方ではなかったようである。学生の中に質問好きの男がいて細かい質問をすると、「そんなことは、君、書いた当人に聞いたってわかりやしないよ⁽²³⁾」と言って取りあわなかったという。寺田の印象では、教場における夏目は最も親しくなつかしい教師であったが、学生の中には夏目を厳格な教師として敬遠する者もあったことを寺田自身が認めている。

五高で夏目に英語の指導を受けた速水滉の追懐談には「一体に先生の其時の感じとしては、六ヶ敷い厳格な態度で、快活な処が少なかったように思う。生徒が下読みを怠ったりすると、可なり手厳しくやりこめられたと覚えている⁽²⁴⁾。」とある。

同じく内丸最一郎も五高の二部で英語を夏目に教わっていた時の印象を「何しろ二部で英語が不得意な方であったため、英語のうまい寺田寅彦君などと違い、厳格な先生の講義ぶりを只管怖がっていた⁽²⁵⁾」と追懐している。

通常の授業の他にも夏目は学生達のために講義した。科外講義である。対象は主として文科の学生であったが、朝7時から8時までの1時間を当てて、シェイクスピアの「オセロ」を講じた。教場における夏目は、ここにあげた例に見られるように、特にどの学生の

ためという意識をもって臨んだわけではなく、いわば自分の義務となっている課業は当然としながら、さらに、機会があれば、義務とされないことまで積極的に奉仕的に勤める勤勉で教育という行為に情熱を注ぐ人であった。そのことは学生達にも伝わり、教場において厳しくても、その厳しさは恣意的な感情によるのではなく、学生を教育する熱情の表われとして理解されていたので、嫌悪の対象になることはなかった。

夏目の教育への熱情は、私宅においても発揮された。夏目夫人の追懷談には、私宅で英語を学生に教える夏目のようすが述べられている。

時期は明確ではないが、長女の筆子が出生（明治32年5月31日生）した後のことと推測される。夏目は暑中休暇に毎日のように来訪する学生（1人）に対して英語を指導した。夏目が学生を叱る声は、季節が夏であるため戸を開け放ってあったので、他の部屋にも聞こえて来る。それが毎日のことなので、学生に同情した夫人が「教場でもあなたあんなにがみがみお叱りになるの⁽²⁶⁾」と聞くと、「いいや、学校じゃあんなに口やかましく叱りやしないさ。しかしこうやって家でただで教えるというものはいいもんだよ⁽²⁷⁾」と答えたという。翌日、夏目が学生に、自分があまり君を叱るのを側で聞いていて、家内はひどく同情していると伝えると、学生は「そうですか、僕はそれほどにも思っておりませんが⁽²⁸⁾」と答えたという。英語を教師の私宅まで訪ねて指導を受けようとする程の学生で、しかも指導が無償で受けられるのであれば、学生のこの返答は適切さを欠いているというべきであるが、夏目と学生の信頼関係を示す事例である。

学生と接する場面に限定してこの時期の夏目を見ると、至って平穩無事で順調な教師生活を送っていたように見えるが、内実は必ずしもそうではなかった。

長女の筆子を妊娠していた妻の鏡子は悪疽に苦しみ、とくに市内井川淵町に居住していた頃が最も重症で、夏目はその介護に腐心した。明治31年後半のことである。翌年5月31日に筆子が出生した時は、その喜びを「安々と海鼠の如き子を生めり⁽²⁹⁾」と詠んだ。この時には市内の内坪井町に移っていたので、寺田が夏目の私宅を頻繁に訪ねるようになった頃のある期間は、夏目の私生活は決して平穩無事とはいいい難かった。しかし、寺田はとくにその事に触れていない。この年6月、夏目は英語主任になる。職場ではその能力が高く評価され順調な昇進を遂げている。同年7月、夏目は「小説『エイルキン』の批評」を執筆し、8月の『ホトトギス』誌上に発表している。夏目が、五高の教員としてだけの生活に甘んじることが出来ず、その才能の発露を俳句を始めとして、文学に属する他領域にも求めていることが察しられる事例である。

この年（明治32年）、寺田は五高を卒業している。⁽³⁰⁾ 明治33年4月、夏目は市内北千反畑の旧文学精舎跡に転居する。職場では教頭心得となる。5月、文部省の命により英語研究のため、2年間英国留学を命ぜられる。

前年、五高を卒業した寺田は、上京して東京帝国大学理科大学に入学し、物理学を専攻する学生になっていた。そして、夏目の紹介で正岡子規に接するようになっていた。明治33年、8月26日の日記には、「漱石師きたり、共に子規庵を訪う⁽³¹⁾。」の記述がある。寺田は当時、本郷区駒込西片町に居り、夏目は牛込区矢来町の中根方（妻の実家）に居た。同年9月6日、夏目は寺田に宛てて、「御見送御無用に候⁽³²⁾」と記した後で、「秋風の一人をふくや海の上」の句を添えた葉書を認めている。

寺田は、9月8日の日記に、「漱石師の洋行を横浜埠頭に送る⁽³³⁾。」と記した。

夏目がロンドンに留学している期間は、寺田と夏目の交渉は専ら書簡に依ることになる。

明治34年9月12日付の夏目の手紙は、暫くの無音を詫びた後、諧謔を交えて近況を報じた後、「学問をやるならコスモポリタンのものに限り候英文学なんかは椽の下の方持日本へ帰っても英吉利に居ってもあたまの上がる瀬は無之候小生の様な一寸生意気になりたがるものゝ見せしめにはよき修業に候君なんかは大に専門の物理学でしっかりやり給え⁽³⁴⁾」と書き、普遍的学問ともいふべき自然科学の物理学を専攻する寺田を激励している。夏目の専攻する英文学は、自然科学と異なり普遍性を持たない上に、自国の文学ではなく他国の文学を研究するものである。この事情は、克服し難い限界として意識されていたので、その対極にある物理学を専攻する寺田に送ったことばには、単なる社交辞令を超える意味があったと考えられる。この手紙の後半では、夏目がロンドンで同居し、啓発された化学者池田菊苗が帰国したことに触れ、寺田に池田菊苗を訪問するよう勧めている。池田は、夏目にとって、「友人の中で尊敬すべき人の一人⁽³⁵⁾」と思われる人物であったからである。寺田に池田への面会を勧める前に夏目は池田に寺田のことを知らせていたので、それを前提としての進言である。長文のこの書簡の末尾には、「貞ちゃんへよろしく／九月十二日漱石／寅日子様⁽³⁶⁾」と記されている。「貞ちゃん」は寺田の長女である。内容はもちろんのこと、その体裁によっても夏目が寺田に対して格別の親しみと期待を寄せていることが察しられる。

この後、夏目が寺田に書簡を送ったのは明治34年11月20日である。この時、寺田は故郷の高知県土佐郡江ノ口町に居た。病氣療養のためである。前回の書簡とは対照的に病氣療養中の寺田に対しては、学問、研究のことには触れず、専ら寺田の健康、彼の家族の健康を案じている。それでも、若干の諧謔を含ませることは忘れてはいない。

「油画やバイオリンや俳句や寔に小説の主人公見た様で結構に思うが其上に病氣で海浜へ養生に来て居る杯は近頃の文学狂が好んで写し出す種と思うが既に妻あり子ありとなつては少々相場が下落する⁽³⁷⁾」。この部分は諧謔を交えた見舞文である。そして、後半に「君の妻君は御病氣はどうです君の子供は丈夫ですか学校杯はどうでもよいから精々療治をして御両親に安心をさせるのが専一と思います⁽³⁸⁾」と書き、真剣に寺田とその家族の健康を案じている。ここに諧謔は見られない。このような文面になるのは、寺田本人とその家族への格別の配慮があったことは当然として、夏目自身、日本を離れ、ロンドンという異郷で英文学を専攻する学徒として過酷な精神的試練を体験しつつあり、そのことによる身心の疲労に苦しんでいた時期でもあったことと、健康問題、家族の安否、親として子を想う気持などがそれに加わって、他人事とは思えない心理状態が働いたからではないかと推察される。

二

この後、夏目はロンドン留学中には寺田に対して一通の書簡も送っていない。明治35年12月5日、夏目はロンドンを発って帰国の途につくが、その間に出した彼の書簡16通の中、半分に当たる8通は妻の鏡子に宛てたものである。明治34年の7月以降「文学論」準備の

ためにロンドン市内の下宿に閉じこもって研究に専念し、留學費の不足、孤独感に悩まされ神経衰弱におちいり、ついには翌年の明治35年9月には神経衰弱が強度になり、他の留學生を通じて発狂の噂が伝えられた時期に当たることを考量するならば、明治34年末から35年末まで寺田に一通の書簡も送らなかった理由は容易に推測されることである。

帰朝後の明治36年3月、留學時の職場であった第五高等学校教授を辞任した夏目は同年4月、小泉八雲の後任として東京帝国大学英文科講師に就任（年俸800円）する。同時に第一高等学校講師を兼任（年俸700円）。こうして、職場を確保した夏目ではあったが、神経衰弱は改善せず、7月頃には約2ヵ月妻子と別居している。そして、同年11月には神経衰弱が再び昂じ、それは翌年の37年4、5月までつづく。

夏目がロンドンより帰朝した後、寺田と夏目の関係はどのように展開していたのであろうか。それを寺田の日記によって確かめると次のようである。明治36年1月25日の日記には、「矢来町（夏目夫人の実家——筆者注）なる夏目先生を訪う⁽³⁹⁾。」に始まり、1月30日、訪問。2月11日、「大学門前にて夏目先生に会う⁽⁴⁰⁾。」、3月13日に訪問、3月22日訪問、3月24日訪問、3月31日訪問、4月4日訪問、4月8日訪問、4月9日訪問、5月2日訪問、5月10日訪問、5月19日訪問、5月30日訪問、6月19日訪問、6月20日訪問、6月23日訪問、9月14日訪問、9月24日訪問、9月27日訪問、10月4日、「夏目先生を誘いて白馬会、研精会、紫玉会、美術協会の絵画を見る⁽⁴¹⁾。」、10月5日訪問。

以上によって明らかなように、頻繁に夏目を寺田は訪ねている。この時期、夏目の住居は、1月23日に東京帰着後の1ヵ月程は妻の実家に寄寓し、3月には本郷駒込千駄木町に転居していた。この借家は夏目の友人斎藤阿具の持ち家で、10年前は森鷗外が借りていた家である。寺田が夏目を訪ねたのは日付けで、3月13日以降はすべてこの千駄木町の借家である。寺田自身はこの時期、夏目の住居に比較的近い小石川区原町の塩谷方に下宿していたので、夏目宅を訪ねるのに負担を感じなかったことは想像に難くないが、その頻度の高さには驚かざるを得ない。それ程寺田にとって夏目は慕わしい人であったということであろう。それでも、夏目の精神状態が不調であった時期は、その訪問の日付けの間隔が空き、そのことから遠慮していたことがうかがわれる。

訪問が頻繁に行われた明治36年に対して37年は訪問回数が減少し、わずかに1月30日、2月3日、7日、11日の4回が日記に記されているに過ぎない。先に記したように、夏目の神経衰弱は、明治36年の11月から再び昂じ、明治37年の4、5月に及んでいるので、その期間に重なることから訪問回数が著しく減少したと考えられる。

一方、長く途絶えていた夏目から寺田への書簡は、明治37年2月9日に送られている。しかし、その内容は特異なものであった。

「水底の感 藤村操女子」と題された詩が次のように綴られている。「水の底、水の底。住まば水の底。深き契り、深く沈めて、永く住まん、君と我。／黒髪、長き乱れ。藻屑もつれて、ゆるく漂う。夢ならぬ夢の命か。暗からぬ暗きあたり。／うれし水底。清き吾等に、譏り遠く憂透らず。有耶無耶の心ゆらぎて、愛の影ほの見ゆ⁽⁴²⁾。」ここにある藤村操は、前年（明治36年）、日光の華嚴の滝に投身自殺をして話題になった第一高等学校の学生で、彼は夏目の英語授業を受講していた。

寺田は、藤村の自殺について、事件発生当時、5月22日の日記に次のように記している。

「一高生徒藤村操、華嚴の滝に投じて死す⁽⁴³⁾」。夏目からこの書簡を受け取った時、寺田が受けた印象は如何なるものであったか。寺田のことは残されていない。しかし、2月11日に、寺田は夏目を訪ねているので、この書簡について何らかの会話があったことは想像される。夏目は、藤村の自殺を自分が授業中に藤村の学生としての怠慢を激しく責めた結果と考え、それを悔いて外部にそれを告白したこともあったので、夏目の側には強い想いがあったはずだからである。

この書簡を送った後、夏目から寺田への書簡は暫く途絶え、9月30日になって絵入りの葉書が送られている。「大変な事が出来たといいながら大変な事を話さずに帰るのはひどい⁽⁴⁴⁾」がその内容である。次いで10月22日に、絵入り葉書が送られ、同じく絵入り葉書が11月2日、7日に送られた。さらに、11月18日の絵入り葉書には、貸家を求める寺田に「本郷六丁目二十五番地藪中という女髪結の隣りに新らしき貸二階あり一寸見て御覧⁽⁴⁵⁾」と記し親身の配慮を見せている。

明治38年に寺田が夏目を訪ねるのは、1月4日で、日記に「午後、夏目先生と本郷へ散歩⁽⁴⁶⁾」の記述がある。この日、寺田は夏目、高浜（虚子）、寒川（鼠骨）と共に「本郷座」へ向かうが満席のため、連雀町の「牡丹」で食事をしている。この2日前、1月2日に夏目は寺田に書簡を送っている。内容は「君年始をやめて雑煮を食いにこぬか可成晩食の際が落付いてよい⁽⁴⁷⁾。」というものであった。これを読んだの訪問であったか否かは不明であるが両者の親密な関係を表わす資料である。

次いで1月23日に絵入り葉書、1月30日にも絵入り葉書が送られている。その内容は「傑作到着鹿の画は倭習を帯ぶ。砂漠の図の方思い切ってよし但色わろし。文章は明星派の系統を引く。いやはや⁽⁴⁸⁾」というもので、これによって、寺田も絵を送るなどして物理学を専攻する学徒としてばかりでない側面を夏目に示し、夏目もこれを評価していたことがうかがえる。2月7日の夏目の書簡は自分の理解者として寺田に寄せる期待が記されている。「今日迄生き延びたから色々の漱石を諸君に御目にかける事が出来た。是から十年後には又十年後の漱石が出来る。俗人は知らず漱石は一箇の頑塊なり変化せずと思う。此故に彼等は皆失敗す。漱石を知らんとせば彼等自らを知らざる可らず這般の理を解するものは寅彦先生のみ⁽⁴⁹⁾」

この書簡から1週間を経たない2月13日にも夏目は寺田に書簡を送っている。絵入りの葉書である。「浅嘉町へ花を買に行った留守に寺田さんが御出になったというから、もう病気はよいのかと聞くとええと云う。なんだもう直ったのか馬鹿な奴だと云ってやったよ⁽⁵⁰⁾」と軽い調子で始まるこの便りには、「然し僕の猫伝もうまいなあ。天下の一品だ。十銭均一位な所にはあたる。……時に続々篇には寒月君に又大役をたのむ積りだよ⁽⁵¹⁾。」と夏目が当時発表しつつあった作品『吾輩は猫である』に触れる内容が見られる。この作品は、前年(明治37年)12月、虚子に勧められてはじめて創作の筆をとり、「吾輩は猫である」と題して、山会（河東碧梧桐、高浜虚子、坂本四方太らの文章会）で虚子が朗読して好評を得たので、明治38年1月「ホトトギス」誌上に発表され、同年2月には「吾輩は猫である・続」が発表された。書簡にある「猫伝」は、この「吾輩は猫である」を指し、続々篇とあるのは、4月に発表された「吾輩は猫である・第三」を指す。また、「寒月君」は同作中の人物水島寒月を指し、寺田寅彦がモデルとされる。「吾輩は猫である・続」に登場する水

島寒月は次のように紹介されている。「此寒月という男は矢張り主人の旧門下生であったそうだが、今では学校を卒業して、何でも主人より立派になって居るという話しである⁽⁵²⁾。」この水島寒月は、「吾輩は猫である・第三」では、夏目の予告のとおり「大役」を当てられている。作中、寒月は、「首縊りの力学」と題する演説をする物理学者として登場し、さらに、主人公「猫」の飼主である珍野苦沙弥（中学校の英語教師）が最も嫌う実業家金田の娘との縁談が持ち上がる人物ともされている。水島寒月について詳細な情報を得ようとする金田夫人に対して、水島は大学院で地球の磁気の研究をやっていること、首縊りの力学という研究結果を発表したこと、「団栗のスタビリチーを論じて併せて天体の運行に及ぶ⁽⁵³⁾」と題する論文を書いたことなどを話題にして金田夫人を当惑させている。

この年、1月8日より途端えていた夏目宅訪問を8月になると頻繁に行い、日記によると、8月20日、25日、27日、28日、29日、9月2日と集中的に訪問がつづく。

この年38年は、夏目にとって作家漱石の名を世に知らしめることになったという意味で重要である。「吾輩は猫である」は、その「第六」までが「ホトトギス」に掲載され、10月には、それをまとめて『吾輩は猫である・上篇』が刊行され好評を得たことがそれを象徴している。

つづく明治39年も夏目の創作活動は活発で、「吾輩は猫である」は「第十一」まで「ホトトギス」に発表され、これが最終回となる。『草枕』（9月）、『二百十日』（10月）も発表された。この年、夏目は多忙な日々を送る中で来訪者の多いことに悩み、面会日を定める。10月8日付の高浜清宛書簡に、「小生来客に食傷して木曜の午後三時からを面会日と定め候。妙な連中が落ち合う事と存候⁽⁵⁴⁾。」と書いている。

この年寺田は、日記によると、1月3日の朝夏目の来訪を受けている。「朝、夏目先生きたる。雑煮を出す。一切れ食いて一切れあます⁽⁵⁵⁾」と記している。寺田の方からは、1月26日訪問。2月20日、夏目へ書簡を送る。2月24日に夏目を訪問した後は10月18日（木）に訪問するまで途絶える。

夏目が、9月2日付の書簡を寺田に送り、寺田の作品「嵐」（明治39年10月の「ホトトギス」に掲載）に触れ「嵐拝見先づ面白い方に候／結末の五六行は大家に候。あれ位短くしてしかもあれを仕舞に置く所が尤もよろしく候。短篇は是で持つものに候⁽⁵⁶⁾。」とその作品を評価した上で、つづく文章の中で「ホトトギス」に掲載をしてはどうかと持ちかけていることより察すると、親交が持続していたことは疑えない。そのような関係であるからこそ、「木曜日が面会日ときまってからも、何かと理屈をつけては他の週日にもおしかけて行ってお邪魔をした⁽⁵⁷⁾」と後に寺田は回想するのである。

寺田との関係は特別のものではあったが、他の門下生に対しても共通する一定した夏目の態度があった。それは、寺田によれば「子供のような心で門下に集まる若い者には、あらゆる弱点や罪過に対して常に慈父の寛容をもって臨まれた⁽⁵⁸⁾」というところにある。

しかし、寺田と他の門下生との大きな違いとなる点、すなわち、彼が他の門下生達が文科系であるのと違い理科系、自然科学系である点がとくに夏目を強くひきつけたことは指摘しておいていいことである。寺田自身、夏目は「一般科学に対しては深い興味をもって、特に科学の方法論的方面の話をするのを喜ばれた。」と述べている。『吾輩は猫である』の水島寒月が理学士で物理学を専攻する学徒と設定されているのは偶然ではないので

ある。

明治40年は、夏目が教師夏目金之助から作家夏目漱石に変わる重大な年である。この年1月、「野分」を「ホトトギス」に発表。『鶉籠』（「坊ちゃん」、「草枕」、「二百十日」の三篇を収録）を刊行。2月下旬、朝日新聞社から招聘の話があり、3月中旬には東京朝日主筆の池辺三山の来訪を受け、入社最終決断をする。直後、夏目はすべての教職を退くべく東京帝国大学、第一高等学校等へ辞表を提出している。

この年、夏目は寺田に3通の書簡を送っているが、朝日入社を決する前に出されたのは1月2日の葉書である。そこには「拝啓来る三日本曜にて例の人々来りて御馳走をこしらえて、たべる由手伝うなら昼から食うなら夕方御出被下度候」と書かれている。この時点では朝日新聞からの招聘の話は発生していないので、全く平常通りの文面である。

夏目の境遇は朝日入社を境にして突然変化するが、寺田との関係がそのことによって大きな変化をすることはなかった。そのことは、夏目と寺田の関係が、教師対教え子という関係で尽きるものではなく、本質的には一箇の人格対人格の関係であったことを示唆するものである。

寺田の次のことばはそれを象徴するものである。「先生からはいろいろのものを教えられた。俳句の技巧を教わったというだけではなくて、自然の美しさを自分自身の目で発見することを教わった。同じようにまた、人間の心の中の真なるものと偽なるものとを見分け、そうして真なるものを愛し偽なるものを憎むべき事を教えられた⁽⁵⁹⁾。」

結 言

本論で明らかにし得たことは、夏目と寺田の師弟関係がいかなる機縁によって成立したかということである。次いで、そのようにして始まった師弟関係がどのような形で持続展開されたかということも明らかにし得たと考える。

とくに、夏目は寺田に対して主として書簡によって、また寺田は夏目に対して主として夏目の私宅を訪ねるなどの手段により、直接面会することによって師弟関係を持続させていたことも明らかにし得たと考える。

そして、両者の資質から来る異質性、すなわち夏目が文学者であるのに対して寺田が自然科学者であるということは、両者の関係を夏目が単に寺田にとって師であるということではなく、同時に、寺田から刺戟を受ける存在であったことも指摘した。そして、また、両者の関係が、人間対人間、人格対人格の関係であって、それは夏目の他の門下生との師弟関係にも共通するものであることも明らかにし得たと考える。

(注)

1. 菅虎雄、学生時代（其三）、文豪夏目漱石所収、春陽堂、大正10年、17ページ。
2. 荒正人、夏目漱石・現代作家論集3、五月書房、昭和32年、28ページ。
3. 同前書、31ページ。
4. 熊本市教育委員会、夏目漱石内坪井旧居パンフレット、1ページ。

5. 夏目漱石, 祝辞, 漱石全集第二十二卷所収, 岩波書店, 1979年, 223ページ。
6. 寺田寅彦, 夏目漱石先生の追憶, 寺田寅彦全集第六卷所収, 岩波書店, 昭和36年, 214ページ。
7. 同前書, 214ページ。
8. 同前書, 214ページ。
9. 同前書, 214ページ。
10. 寺田寅彦, 日記一, 寺田寅彦全集第十三卷所収, 岩波書店, 昭和36年, 25ページ。
11. 同前書, 27ページ。
12. 寺田寅彦, 夏目漱石先生の追憶, 前掲書, 214ページ。
13. 同前書, 214ページ。
14. 同前書, 215ページ。
15. 荒正人, 漱石研究年表, 集英社, 昭和59年, 219ページ。
16. 寺田寅彦, 夏目漱石先生の追憶, 前掲書, 215ページ。
17. 同前書, 215ページ。
18. 同前書, 216ページ。
19. 同前書, 216ページ。
20. 夏目鏡子述, 松岡譲筆録, 漱石の思い出, 文芸春秋, 1994年, 83ページ。
21. 寺田寅彦, 夏目漱石先生の追憶, 前掲書, 217ページ。
22. 同前書, 217ページ。
23. 同前書, 217ページ。
24. 速水滉, 熊本時代其一, 文豪夏目漱石所収, 前掲書, 36-37ページ。
25. 内丸最一郎, 同前書, 38-39ページ。
26. 夏目鏡子述, 松岡譲筆録, 前掲書, 88ページ。
27. 同前書, 88ページ。
28. 同前書, 88ページ。
29. 夏目漱石, 俳句, 漱石全集第三十三卷所収, 岩波書店, 1979年, 162ページ。
30. 寺田寅彦, 夏目漱石先生の追憶, 前掲書, 218ページ。
31. 寺田寅彦, 日記一, 前掲書, 33ページ。
32. 夏目漱石, 書簡集一, 漱石全集第二十七卷所収, 岩波書店, 1980年, 12ページ。
33. 寺田寅彦, 日記一, 前掲書, 34ページ。
34. 夏目漱石, 書簡集一, 前掲書, 156ページ。
35. 同前書, 156-157ページ。
36. 同前書, 157ページ。
37. 同前書, 160ページ。
38. 同前書, 160ページ。
39. 寺田寅彦, 日記一, 前掲書, 70ページ。
40. 同前書, 71ページ。
41. 同前書, 83ページ。
42. 夏目漱石, 書簡集一, 前掲書, 196ページ。
43. 寺田寅彦, 日記一, 前掲書, 76ページ。
44. 夏目漱石, 書簡集一, 前掲書, 211ページ。
45. 同前書, 217ページ。
46. 寺田寅彦, 日記一, 前掲書, 93ページ。
47. 夏目漱石, 書簡集一, 前掲書, 222ページ。
48. 同前書, 228ページ。
49. 同前書, 229ページ。

50. 同前書，231ページ。
51. 同前書，231ページ。
52. 夏目漱石，吾輩は猫である上，漱石全集第一巻所収，岩波書店，1978年，23ページ。
53. 同前書，95ページ。
54. 夏目漱石，書簡集二，漱石全集第二十八巻所収，岩波書店，1980年，97ページ。
55. 寺田寅彦，日記一，前掲書，105ページ。
56. 夏目漱石，書簡集二，前掲書，82ページ。
57. 寺田寅彦，夏目漱石先生の追憶，前掲書，222ページ。
58. 同前書，222ページ。
59. 同前書，225ページ。

追記：引用文中の旧漢字旧仮名づかいはすべて新漢字，新仮名づかいに改めたことをことわっておきたい。